「おそれを超える～相手を思う心」

●「はけ口」

昨年（2019年）7月、新宿駅からタクシーを利用しました。運転手さんが、目の前の大型ビジョンに映るニュースを見上げて、「昨日はひどい事件でしたねぇ」と語りかけてきました。
「そうですねぇ、こういう事件（京都アニメーション放火）が続きますね」
「4日の目黒駅前の傘による失明事件」
「どちらも『見知らぬ人』の犯行と報道されてますね」
話は広がり、2018年の事件でしたが、この7月17日まで発表されていなかった岡山県警察学校の訓練中の傷害事件に触れ、上司の警官が部下の新任警官を傷つけたことも話し合いました。
「共通するのは、なにか、鬱憤（うっぷん）のはけ口がキレて、こんな事になるのでしょうかね」

●「暴力」が自己確認?

2019年7月の参院選の選挙期間中の15日、北海道で応援演説中の国会議員に「増税反対」などと声に出した聴衆二人を、警官数人がそれぞれ取り囲んだり、身体をつかんで後方へ連れていったりしたこと話題にしてから、私は自分の思いを語りました。

「日本は今、格差社会などと言われていますね。
そうした状況で、権力や経済力を持った立場の人の中には、自分より立場の弱い者に対して、パワハラなどの横暴や、経済的に弱い立場の者に対しての圧迫などが生まれていますね。
これは、弱い立場からすれば、自分を対等な人間として認めてもらえないという非肉体的な『いじめ』『暴力』を受けているのではないでしょうか。
弱い立場に立たされ、しわ寄せを受けた人たちは、今度は、自分を認めさせる『はけ口』として、自分よりもさらに社会の弱者の立場の人を見つけ、暴力を振るっているんじゃないでしょうか。
勿論、暴力を肯定するのではないですが、そんな社会が、今、弱い立場の人たちをやるせなくして、暴力という形で、相手や周りに自分を認めさせようとしているのかと思いますよ。」

運転手さんは、ウンウンと肯（うなず）きながら聞いてくれました。
実は、後になって調べると、心理学者のJ. T. テダスキが、

「人間は何らか恐怖を感じたり、危機的状況に遭遇したりすると、相手を攻撃したり強制的に従わせたりするなどの策を講じることで、自分の社会的地位や社会的アイデンティティーを主張する」

と「攻撃は対処行動の一つ」という説を主張していることを知りました。

●わが身を通して

ある大学教授から教えて頂いた、「仲間意識は、仲間はずれを作る」という言葉が今も心に残っています。
たとえば「仲良し」という言葉でも、それは「仲良し以外」と明確な線引きをします。しかし、「仲間意識」となると、仲間でない立場の人たち、つまり、「仲間はずれ」という関係性を生みます。
「子供を問題行動に向かわせないために～いじめに関する追跡調査と国際比較を踏まえて～」（国立教育政策研究所、2006年）には、国際比較を通すと日本は、「いじめ」の問題が起きたとき、中学生以降の子どもたちの言動には傍観者となる割合が高く、それは「大人」や「社会」の反映ではないかという報告がありました。こうした判断が、まったく正しいと言えるかどうかは分かりませんが、大変、気になる指摘だと思います。
お釈迦さまは、
「すべての者は暴力におびえる。すべての（生きもの）にとって生命は愛しい。己（おの）が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」『法句経』130偈
と説かれています。
私は、相手の立場に自分を置いて（つまり、お釈迦さまのお言葉で言えば、「己が身にひきくらべて」）、今回の事件を考えていただろうか、傍観者となっていなかったか、と問いを頂きました。
実はタクシーを降りる時、こんな言葉をかけてくれたのです。
「私の子は、東京でアニメーションの背景を描いているんです。給料は少ないけど、仕事に誇りを持ってるんです」と語ってくれた一言で、遠い所で起きた出来事を思いも掛けずとても近くに感じました。
この世の中は、私たちの意識が反映するといわれます。
あるツイートに、「強大な権力の圧力に「おかしい」と疑問を持つほうが「おかしい」と思わせられる世界。それが当たり前だったなら、今から変わっていってほしいです。」
とても、繊細で、考えさせられる言葉です。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。